
百怪 犬猫の怪 1 1話

annmin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百怪 犬猫の怪1-1話

【NNマーク】

N4562M

【作者名】

ann-n

【あらすじ】

我々の最も身近な動物に関する怪。

「錯覚」

聞いた話。

ある30代のサラリーマンが仕事から
自宅のあるアパートへ帰つてくると、
部屋のソファーで見知らぬ女性が
子供を抱えるようにして寝ていた。

女性は彼に気付くと

「ねえ、アメ買つてきて。この子が
欲しがっているから」

と当たり前のようになに話しかけてきた。

部屋を出て、番号を確認すると確かに
自宅である。

自分は独身だし、親戚の誰かが来るといつ
話も聞いていない。

そもそも、鍵は掛けてきたしスペアキーを
誰かに預けた覚えもない。

彼は言われるがままに近所のコンビニで
百円相当の安いアメを購入すると、
再び自宅へと戻った。

部屋に入ると、あの女性と子供の姿はなく、入れ替わりのように飼っていた猫が一匹、ソファの上で寝息を立てていた。

オスとメスで、どちらも元野良猫。ただ、メスの方が先輩猫で、オスより4歳ほど年上であったという。

彼は何気無く買ってきたアメをその先輩猫の寝顔に近付けると、ビクッと飛び跳ねるように起きた。そしてアメに鼻を近づけフンフンと鳴らすと、ソファを飛び降りてエサのある台所へ行き、催促を始めた。

もう10年ほど前の話で、その先輩猫も死んでしまったが、そんな事があったのはその一度きりだったという。

「タブー」

念願の一戸建てをローンを組んで購入した、そこの大さんの話。

家を建ててまず真っ先にした事は、ペットを飼う事だった。

子供の頃から実家が猫を飼っていた彼女は、さつそく以前から話しを通して友人より一匹の子猫を譲り受けた。

その友人の家で飼っていた猫が産んだ子供で、両方ともメス。

家に来た姉妹猫は家族からとても可愛がられた。

3年もすると、一匹とも立派に成長し、一匹は豊満というか全体的にバランス良く成長したが、もう一匹はお腹に肉が集中し、「太ましい」「タヌ子」と呼ばれるようになった。

ある時、その姉妹猫が食後の毛づくろいをしているのを何気なく見ていたが、ふと横になっていた「タヌ子」のお腹を、何を思ったのか、もう一匹が片方の前足で「ぶに」と押した。

「何するのよつ！…！」

大声と共に「タヌ子」は、前足で引っぱたくように思い切り猫パンチをその姉妹猫に食らわせた。

聞こえた声は若い女性のそれで、部屋には人間の女性は彼女しかいなかつたのだが、はつきりと自分以外のその声を聞いたといつ。

「まあ、それは怒るでしょ、
と思つたけど……
あんな声まで出して、

相当気にしていたのね

声を聞いたのはその一度きりだったと
いうが、未だにその一匹は健在だそうだ。

「因果」

一人暮らしを始めてもう10年になる
知人の話。

彼の実家は猫を飼っていた。

というより、ペットは猫しかいなかつた。
それは彼の生まれる前から、家を出るまで
変わらなかつたという。

しかし、一人暮らしは当然アパートか
マンションになる。

ペットはたいてい飼う事は出来ない。
犬猫クラスになると、ごまかす事も
不可能だ。

「でもねえ、不思議と家には何か
いたんですよ」

ある時、道路脇の茂みに引き出しが
捨てられていた事があつた。

木製のそれは、ヒマワリの種が大量に
入つていて、妙に目を引いたという。

何かと思つて近付くと、動くものが見えた。

「ハムスターでした」

それは後で調べるとキンクマといわれる種類だとわかつた。

茂みの中にもう一匹いて、計2匹を結局家に連れて帰つた。

「引越し何かの時に一緒に捨てたんでしょうけどね」

そのハムスターは2年ほどで他界してしまつたが、それから1年と経たずに今度は巣から落ちたムクドリを保護し、飼う事になった。

「その後はハトのヒナとか、小動物を拾う機会がありましたね」

都内では、基本的に野鳥は捕まえる事は禁止されているらしい。

しかし保護する分には構わないようで、動物病院では治療費などは無料になつたという。

ある時、ふと今まで拾つたペットの事を考えてみた。

ネズミ、小鳥、ヒナ……

彼には心当たりがあつた。

「今まで、家の猫が捕まえた獲物？」

聞くと、彼は「クリとうなづいた。
それから少し困った顔をして、

「コウモリを捕まえてきた時もあつたん
ですけど、どうしましようか？
僕、コウモリの飼い方なんて知らないん
ですけど」

その時はその時で、と答えると、今までに
購入したオリやエサ箱があるから、何とか
なるかなあ、と彼は頭をかいていた。

「接待」

親戚の人から聞いた話。

その人の知り合いが仕事の都合で上京し、
都内に移り住む事になった。

その時、引越しの手続きが済むまでの間、
家にその家族を泊める事にしたという。

その家族が初めて泊まりに来た日。

仕事で深夜に帰宅した彼は、その家族が
すでに寝ているだろう部屋を静かに通り

過ぎ、自室へと向かつた。

その途中、何やらにぎやかな音がする。

それはどうも、子供の部屋から聞こえてくるようだった。

「その時は子供はみんな独立していたし。何だらう、と思ってのぞいたんだ」

すると、TVゲームで遊んでいる人影が目に入った。

2人いて、1人は髪の長い20才そこそこの女性、もう一人は12、3才くらいの女の子に見えたという。

「知り合いの子かな」

まあ好きにさせてやるうと、彼はそのまま自室に戻り、眠った。

朝起きて知り合いと一緒に朝食を食べている時に、彼は気付いた。

「知り合いの子に、女の子はいなかつたんだよね……」

そもそも、男の子の兄弟で、2人ともまだ小学生だったし

彼は家族にはその事を話さないで、密かに子供部屋へ向かつた。

見ると、昨夜見たTVゲームは残されており、そのそばで猫が2匹、寄り添つて

眠っている。

1匹はメスで、今年3才になる自分の家の飼い猫である。

しかし、もう1匹の、一回り小さな黒猫に心当たりはない。

すると、知り合いの奥さんが入ってきて言つた。

「あ、コタローちゃんここにいたの」

聞くと、すでに去勢してあるので、オスだけどメスと一緒にいても問題は無いと説明された。

まだ1才にも満たないらしい。

「室内飼いだつたし。自分より小さい子が来たので、接待でもしていたのかねえ」

ちなみに、その時に遊んでいたのは、某格闘ゲームだつたそうだ。

「電車」

とある会社員の方から聞いた話。

彼の会社の最寄駅は階段が長く、さらに使用している方面出入口はエスカレーターが

設置されていなかった。

「帰りは下りだから楽ですけど」

ある日、彼が帰宅しようと駅の階段を降りていくと、自分の足元の視界に駆け下りる影が入った。

「え？」

あまりの速さに正確な姿は確認出来なかつたが、それは黒猫のように見えた。

急スピードで階段を駆け下りると、ちょうど駅に停車して開いていた電車のドアの中へと消えてしまった。

当然だが電車はドアを閉じ、そのまま次の駅へ発車した。

「変な猫もいるもんだなあ、その時はそうとしか思わなかつたんですけど」

数分後、隣りの駅で電車が止まつたとのアナウンスが入つた。

「線路に人が入つたとの情報で……」

その日の帰りは1時間ほど遅れたといつ。

「ガラス戸」

下町、と呼ばれるとこひで住んでいる
お婆さんから聞いた話。

今年で80歳になるといつ。

「この前、縁側でお茶を飲んでたらね」

家の中では夫がTVを見ている。
ブロック塀、その下の小さな庭をボーッと
見ていると不意にTVの音量が上がった。

「でね、音を小さくしてって言おうと
振り返つたんだけど」

ふと、半分ほど開いた引き戸のガラス部分に
何かが写っているのが目に入った。

子供が2人。

それも、昔風の格好の。

対照的な白い着物と赤い着物を着たその
2人は、ブロック塀の上に立つてふざけ
合っている。

「あんたたちつーーー！」

注意しようつと大声を上げながら振り向くと、
そこに子供はいない。

代わりに、子猫が2匹、お婆さんの方を
ジッと見つめていた。

「黒いのと茶トラのコだつたけど。

毛の色に関係無く、好きな着物を

着れるのかしらねえ」

その後、すぐに姿を消してしまったが、
今でも時々庭に現れるらしい。
しかし、そんな姿を見たのはその一度きり
だったという。

「天井」

警備会社に勤める親戚の青年は、自宅で犬を
飼っていた。

「一人暮らし向けのワンルームマンションで
本当はいけないんですけどね……」

ミニチュアダックスフントと呼ばれる種で、
活発だが吠える事はなく、自分のいない時は
非常に大人しくしているようだった。

「散歩にも連れて行けないから、自分がいる
間は出来る限り遊んでやつてね」

ある日、遊んでやつていると遊び疲れたのか
そのままコロン、と横になり寝てしまった。
起こすのは可哀想だと思い、彼は買い物へ
出かけるためそつと家を出た。

外から帰つてくると犬はまだ寝ていた。

仰向けになつて、手足をパタパタと動かしている。

夢の中でも走つているのかな、と微笑ましく思つてゐると、犬が目を覚ました。

彼に気付くと、トコトコと歩み寄り顔をペロペロと舐めてくる。

その舌から逃れようと顔の向きを思わず変えた時、視線に天井が入つた。

「え？」

一直線に動物の足跡が付いていた。

サイズからすると小型のようだが……

それから、天井を掃除するのが大変だったと彼は語つた。

その事があつて以来、何度か同じように足跡が付く事があつたらしい。

「そのコの足跡？」

と私が聞くと、

「わかりませんが、一度“天井を走るのは止めてくれ”って頼んだら、それからもう足跡が付く事は無くなりました」

そう言つて、彼は尻を曲げた。

「姉」

知り合いの寺の住職の話。

座禅を組んでいると、パタパタパタと廊下を走る音がする。

ちょうど夏休みで親戚が集まつてあり、その中の子供たちの1人だろうと思つて、注意をしようと振り返つた。

2、3才くらいの男の子がちよつと廊下を走つていいくのが見えた。

“こらこら、止めなさい”と口を開きかけたところ、14、5才の少女が後を追いかけてきて、子供を抱き上げた。

どうやら、その子の姉らしい。

「どうもすこません、

田を離すとすぐここに行つちゃつて」

「こやこや、ここへの年頃の子は皆そうだから」

そう応えると、ペコペコと頭を下げて、少女は奥の部屋へと下がつていった。やがて座禅を終えると、彼も法事のために親戚の集まる部屋へと向かつた。

「おや？」

部屋に入つて見渡すと、あの男の子の姿が見えない。

またどこかへ行つてしまつてケガでもされたら

行方を親戚に問うと、総出で寺の中を捜索する事になった。

もしや外に出てはいないかとぐるりと寺の周りを一周すると、縁側に立つ男の子を見つけた。

外側へ両手を伸ばしながら、後一步踏み出せば落ちそうに

「危ない！」

慌ててその場へ駆け出す。

しかしよく見ると、子供の体は落ちそうで落ちない。

近付くと、その子の後ろで着ている服の裾をくわえて、必死になつてふんばつている犬の姿があつた。

「あ、この犬は……なんとまあ」

その犬は「ゴールデンレトリバー」といわれる種で、ある親戚が毎年、お寺に来る時は知人に預けていたのだが、今年はどうしても都合が付かず、

連れてくるという話を予め聞いていた。
室内飼いだし、性格も大人しいメスだと
いつので、寺に上げるのを含めてOK
していたという。

彼が子供を抱きかかえて部屋への道を
戻ると、その犬も心配そうに後について
くる。子供が見つかった事を告げると、
親戚一同、胸をなでおろした。

しかし、引っかかるものがあった。

部屋を見渡すと、その子の姉と思われる
少女の姿が見えない。

まだ探し回っているのかも、と聞くと、
姉はいないし、そんな年頃の女の子は
今日は来ていないという。

彼も思い出してみると、その少女の顔に
見覚えが無かつた。

いくら何でも、子供の頃から知つていれば
忘れるはずはない。

新顔といえばその犬くらいの
ものだつたが
今年で5才になるというその
ゴールデンに目をやると、
男子子に抱きつかれるようにして、
その顔をペロペロと舐めていた。

「先回り」

地元の会社に勤めているところの方から聞いた話。

「元々、上京して都市部の会社に勤めていたんですけど」

入社して2年目、いきなりの異動命令が下った。

それが彼女の場合は地元で、『いづこづ事もあるのかなあ』と思つたといつ。

「都会の便利さに慣れたのもあって、正直嬉しさと寂しさが両方ありましたけど」

とはいって、やはり地元に戻るのは嬉しい。しばらくは実家から通うから、と伝えると両親は喜んで迎えてくれた。

その年の6月、お正月で里帰りしてから半年ぶりで、彼女は最寄の駅に降り立つた。予め荷物は郵送してあり、文字通り身一つの帰郷である。

と、駅のホームから白い物が見えた。

「ありや、チコ。迎えに来てくれたの」

それは彼女の実家で飼っていた、柴犬の

雑種のメスだつた。

白い毛並みのしつぽをブンブン振り回して、
彼女がホームから出てくるのを待つている。

「実は、いきなり帰つて両親を驚かそつと、
連絡はしてなかつたんですよ。

その時は“動物のカンなんだろうな、
スゴイなあ”つて思つて」

彼女も嬉しさのあまりホームを飛び出すると、
そこにチコはいなかつた。

あれ？と思つて見回すと、5メートルほど
先の曲がり角でこちらを見ている。

足を進めると、その角へさつと消えた。

それは、よくチコが散歩の最後に取る行動
で、よく困りされたものだつた。

「こいつめ～とか思つて追いかけて。
でも、角を曲がるとまた先の方にいるん
ですよ。

面白くなつちやつて、それで家まで
走らされちやつて……」

家に着くと、父親は仕事で留守だつたが
驚いた母親が出てきた。

“ちゃんと連絡しなさい！”と怒られた
後、いそいそと母が料理を作り始める。
久しぶりの手料理と期待しつつ、台所に
立つ母にチコの事を話した。

「でもチコはやっぱり犬だね」。

「アイツ、話さなくても迎えに来たよ」

その事には応えず、会社での様子とか、まだ恋人はいないの等、逆に母からの質問が続いた。

やがて出てきた料理に舌鼓を打ちつつ、話が再びチコの話題になると

「あのね、お前が悲しむから帰つてくるまで話さないでおこつと思つてたんだけど……チコ、もういないのよ」

元々が老齢であつたが、5日ほど前に容態が悪化して、その日の夜に死んだという。リビングから外庭を見ると、主を失つた小屋が彼女の目に入った。

「でも、生きている時みたいに走つて何度も先回りしてたよって言つたら、“もう立たないほど衰弱してたんだけどねえ、元気になつたんだね、良かつたねえ”って。もう死んでるのに、元気も何もないって」

そう話す彼女は少し鼻声になつていた。
今、実家には柴犬の男の子がいるそうだ。

「腹痛」

会社勤めを始めて間もない頃、
という前置きで、ある女性から
聞いた話。

まだ1人暮らしではなく、実家から職場へ
通っていた彼女は、入社してからしばらくは
仕事に慣れず、疲労困憊して帰宅する日々を
送っていた。

「慰めは、家にいたゴローでしたね」

ゴローとは実家で飼っていた犬の名前で、
あまり賢くなく、言い方は悪いがその
バカツぶりを可愛がられているような
雑種の中型犬だった。

家族全員になついていて、家に帰ると
玄関先で庭の小屋からしつぽを振つて
飛び出してくる。

犬なのに運動神経も悪く、その度によく
滑つて転んだりして、その仕草も彼女の
疲れを癒していた。

「勤めて半年くらいかな、変な夢を見
るようになつて」

夢の中の彼女は真っ暗な世界にいて、
それだけでも不安になるところへ、
“ある者”に追いかけられる。

人の形をしてはいるが、顔も格好も分からない。

ただ質感的に薄っぺらい印象で、それが全力で追いかけてくるのだ。

逃げて逃げて逃げ回り、目が覚めると疲れが全く取れていない、そんな事が1週間ほど続くと、さすがに体調も崩れてくる。

「何かもうクタクタになっちゃって。
家族には心配かけないようにしてました
けど、ふと「ローラーをなでていたらジッと
こちらを見つめていて。
一応犬だし、何かに気付いているのかな、
って」

しかし、それ以外は特に何の反応もせず、
小屋の中へ戻つていった。

「それで、その夜なんですけど……
また、あの夢を見たんです」

真つ暗な世界、そして追いかけてくる
異形のモノ
夢の中まで体力が落ちていいようで、
段々とその距離は縮まっていく。

「今まで捕まつた事はないけど、
もし捕まつたら」

初めてそんな考えが頭に浮かび、

それは本能的な恐怖となつて彼女の体を突き動かす。

意志とは裏腹に、どんどん手足が重たくなつていって

もう少しで捕まる！と思つた瞬間、

目の前の暗闇がパカツと開いた。

「本当にこう、いきなり扉が現れて開いた」というか。

でも、その開き方が何かこう

彼女は手の甲を上にして水平になると、親指以外の4本をぴたりとそろえて、下の親指とくつつけたり離したりした。

それは、彼女の背丈ほどもある口だつたといふ。人間の口ではない事は、中にある牙が物語ついていた。

あまりの事にその場にへたり込み

もうじうする事も出来ずについた、次の瞬間。

「その口が、頭の上を通り越して、
そのまま後ろへ」

そして背後から、何かを噛み砕き、
引き千切る音が聞こえてきた。

同時に、“ぴい、ぴいい”という人とも獸ともつかない断末魔が

何が起きているのかは充分に想像出来たが、怖くて振り向く事は出来なかつた。

気付いたら、そのまま朝を迎えていた。

布団の中ではなく、なぜか玄関前の廊下に横たわっていたという。

靴置き場には、外にいるはずのゴローがいた。

「台風や酷い雨の日には家に入る事もあつたから、誰かが入れたのかな、と思つてたんですけど」

よく見るとゴローの様子がおかしい事に気付いた。

「ことなく元気が無く、グッタリしている。その日は会社を休んで、動物病院へゴローを連れて行つた。

「また変なものの食べちゃつたのかな、ゴロー君は」

ゴローは、拾い食いをしてお腹を壊した経験があつた。

何度もゴローを診てゐる獣医さんは、急いでレントゲンを撮る準備を始め、ゴローを診察台へ乗せる。しかし、出来上がつた写真を見て、彼は首を傾げた。

「何だろ、これは。

何か飲み込んだじゃつたのかな?」

白黒のレントゲン写真には、小さく角ばった黒い塊が写し出されていた。

それほど大きな物ではないので、取りあえず病院では薬で下してみる事にして、万が一容態が悪化したら、すぐに受け入れる約束をしてくれた。

彼女の心配をよそに、ゴローの体調はフンが出た途端ケロリと治った。何を食べたのかと気になつて、出てきたフンを調べてみたところ、炭のように真つ黒な木の破片みたいな物が出てきた事以外は、何もわからなかつた。結局、それはフンと一緒に捨ててしまつたといつ。

「でも、あの日以来悪夢も見なくなつたんです。
やつぱりゴローが何とかしてくれたのかなつて」

その後、彼女たつての頼みで、ゴローは室内犬として家の中へと入れられた。ただ、あの日誰が玄関にゴローを入れたのかはわからず、今でも謎のまだという。

「氷水」

「一階建てのね、一階に住んでいたんだけど」

その男性は借家に住んでいた。

一戸建てだが、一階と二階が分離・独立した造りになつてあり、お互いのプライバシーは守られていた。

「それでも生活音といいますか、足音とかちょっととした大きな音とかは聞こえてましたけどね」

彼はプログラマーで、二階の人は老人。深夜帰りの多い彼は基本的に接点が無く、無関心な日々を送っていた。

「でもね。タイミングつてものがあるでしょ。いくら何でも生活の音がしない日が続き過ぎると……」

5日間ほど、上から全く音がしないのが気になつた彼は、管理人に連絡。結果、衰弱しきつた老人が発見され、そのまま入院という流れになつた。

「いくら何でも、上の階で死なれちゃ後味悪いですから。」

その時は胸をなでおろしましたよ

だが、そこからがおかしかった。
取り合えず警察から事情を聞かれる事になつたのだが、何かいちいち引っかかる言い方をしてきたという。

「本当に誰も来なかつたのか、とか。
ドアの開け閉めの音はしたか、とか。
1年くらい住んでましたけど、その人の
知り合いは見た事無かつたんで」

警察は当初しぶつていたが、事情を説明し始めた。

曰く、老人というのは抵抗力が極めて弱い。
ちょっとした風邪、ケガでも死に至る。
上の階の老人は神経痛か何かで動けなく
なつたらしいのだが、1週間ほどその状態で
いたらしい。

「でも、一応布団には寝かれていたし、
何より食事はどうしていたのか、それが
わからなかつたみたいで」

数日後、その老人から彼に管理人つてに
連絡が来た。

入院したはいいが、そのまま寝たきりになつて、戻れない可能性が高いので、
出来れば部屋の後始末などを頼みたい、
という事だった。

そこまでの義理は無いと思いつつも、もう部屋に戻る事が無いのならばと、見舞いも兼ねて老人に話を聞きに言った。

「そこまでついてどうか……どうやって一週間も飲まず食わずにいられたのか聞いてみたんです」

聞くと、夢の中で食事をしていたのだと答えた。

バカげた話かも知れないが、見知らぬ、しかし以前から知っているような中年の女性が、夢の中であれこれと世間話をしてくれたと。

「喉がすぐ渴いてな。

するとすぐに氷水を持ってきてくれた。

冷たくてうまかったなあ……」

夢の中で食事をして、本当にじたと錯覚した事で助かったのかなあ、とあまり深くは考えず、後処理の詳細を聞いて病院を後にした。

家に帰ると、管理人の許可をもらつて後片付けに入つた。

とは言え、基本的にする事は中にある荷物を全て捨てる事くらいである。

「管理人は、どつちみち専門の業者に依頼する、とは言つてましたけどね。でも一応はこちらも頼まれたので。それほど荷物があるわけでも無いし、作業自体は楽でした」

「一通りゴミ袋にまとめたところにある物が田に入つた。ネコ缶である。しかし、ネコトイレやエサ入れが無いところを見ると

「ここはペット禁止だつたんですけど、いわゆる“通い猫”がいたんでしょう。もう戻つてくる事はないんだし、管理人や大家には内緒にしておこうと思つて、それ絡みの物も全部ゴミ袋に入れました」

ふと、台所の方から風が入つてきた。その窓、少し開いた隙間に、おそらくその通り猫と思われる猫が立つっていた。

取り合えず残つていたネコ缶でも、とゴミ袋を開けようとした時には、すでに猫は消えていた。

そしてゴミ袋の口をまた閉じて、部屋を出ようと玄関の方へ振り向いた時

「氷水の入つたコップがあつたんです」

部屋の中央、床にそれは突然出現した。

もちろん自分が用意した覚えはない。

なぜか手をつけてはいけないような気がして、ゴミ袋をぶつけないように注意しながら、彼は部屋を出た。

「というかね、考えてみれば引っかかる
言い方とは思っていたんです。
夢の中の事を“冷たくてうまい”って
言いますかね」

ちなみに、その猫は少し太り気味の茶トラ
だつたそうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4562m/>

百怪 犬猫の怪 11話

2010年10月22日00時00分発行